

事 務 連 絡
令和 8 年 3 月 6 日

各 位

金 沢 市 医 師 会

当会広報誌「すこやか」第199号「小児のワクチンについて」内の
ヒトパピローマウイルスワクチン（HPVワクチン）の
2回接種、3回接種年齢の記載の誤りについて

春分の候、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、令和8年3月1日発行の当会広報誌「すこやか」第199号「小児のワクチンについて」内に（3頁）記載がありますヒトパピローマウイルスワクチン（HPVワクチン）の2回接種、3回接種での接種年齢に誤りがございました。

ここにお詫び申し上げ、次のとおり訂正いたします。

ヒトパピローマウイルスワクチン（HPVワクチン）の2回接種、3回接種年齢

（誤） このワクチンは15歳以下で開始された場合は2回の接種で良いですが、
16歳以上で始めた場合は3回の接種が必要となるためご注意ください。

↓

（正） このワクチンは14歳以下で開始された場合は2回の接種で良いですが、
15歳以上で始めた場合は3回の接種が必要となるためご注意ください。

すこやか

2026. 3 第199号

発行：金沢市医師会
責任者：鍛冶 恭介
金沢市大手町3の21 TEL.263-6721
URL:<http://www.kma.jp>

小児のワクチンについて

はじめに

近年、小児へのワクチンは以前と比べて種類が増えていたり名前が変わっていたりして、戸惑われる方も多いのではないのでしょうか。今回は現在実施されている小児期の予防接種についてご説明いたします。

定期接種

定期接種は、公費で行われるため費用の負担はありません。

① 5種混合ワクチン (DPT-IPV-Hib)

生後2か月過ぎから始まります。以下の5種類の病気の予防を目的としています。

- ジフテリア：発熱、のどの痛み、犬が吠えるような咳を主症状としますが、心臓の筋肉や神経が侵され命に係わる場合があります。日本では予防接種の効果で感染者0が続いていますが、アジア諸国では時々流行しています。
- 百日咳：連続する強い咳が特徴で、とくに乳幼児がかかると重症化し、呼吸困難から時に死に至ることがあります。

2025年は小学生以上を中心に流行が見られました。

- 破傷風：土の中にいる菌が傷口から感染し、筋肉にけいれんを引き起こします。最初は口がこわばり開かなくなり、その後全身けいれんをおこし、命にかかわる病気です。
- ポリオ（急性白髄炎）：手足の麻痺から始まり、時に呼吸不全となり、死に至ることもある病気です。ワクチンにより日本を含む多くの地域で根絶宣言がなされています。以前は口から飲む生ワクチンでしたが現在は5種混合ワクチンに含まれています。
- ヘモフィルスインフルエンザ菌（ヒブ）：肺炎や中耳炎、時に髄膜炎などの原因となります。2009年ヒブワクチンが導入されてからは小児のヒブ関連の重症感染症は激減しました。現在は5種混合ワクチンに含まれています。

② ロタウイルスワクチン

ロタウイルス胃腸炎は、「乳幼児冬季下痢症」と呼ばれていましたが、今は流行時期が冬に限らず、白っぽい下痢便、嘔吐、発熱が特徴です。脱水、けいれんな

どもおこし乳幼児は重症化しやすいです。2020年に定期接種となって以降感染者は激減しています。ワクチンは口から飲むタイプで、生後6週（一般的には2か月頃）から開始され、2回飲むタイプと3回飲むタイプの2種類があります。どちらを選ぶかはかかりつけ医とご相談ください。

③小児用肺炎球菌ワクチン

肺炎球菌は小児の肺炎、中耳炎、副鼻腔炎、そして髄膜炎などの原因となります。日本では2013年から定期接種が始まりました。肺炎球菌には多くの「血清型」と呼ばれるタイプがあり、ワクチンは重症感染をおこしやすい型をターゲットに作られています。導入当時は13種類の型をカバーしていたのが、2024年4月には15種類、同年10月には20種類へと、現在進行形で改良が進んでいます。

④ B 型肝炎ワクチン

B型肝炎ウイルスは感染すると急性肝炎となり、黄疸、食欲不振、全身倦怠感等の症状が現れます。多くは治癒しますが、約1%以下の頻度で劇症型となり命に関わることがあります。また免疫が不安定な時期に感染するとウイルスが肝細胞内でくすぶり続ける持続感染（キャリア）の状態となり、将来的には肝硬変や肝がんへと進みます。2016年に定期接種となりました。生後2か月から接種が開始されます。お母さんがB型肝炎ウイルスに感染している際は生まれてくるお子さんへの母子感染が問題となりますが、B型肝炎免疫グロブリンとB型肝炎ワクチン接種で母子感染予防ができますので、出産の前に産婦人科の先生とご相談ください。

⑤ BCG（結核のワクチン）

我が国の結核患者数は低水準で推移していますが、高齢者や高まん延国からの渡航者を介して小児が感染するリスクは

常にあります。結核は肺に感染する病気ですが、とくに抵抗力の弱い乳幼児では髄膜炎になったり、菌が全身に広がったりして重症化しやすいため予防が大切です。かつてはBCGの3か月前にツベルクリン反応検査（ツ反）ですでに結核に感染していないか確認を行っていましたが、2005年からはツ反は廃止され、生後5か月からのBCG接種のみとなっています。BCGは「ハンコ注射」とも呼ばれる形の針を使用しますが、最近、「BCGの痕が腕に残っていないけど、ちゃんと接種できていますか？」と心配される方が時々いらっしゃいます。数年前まではBCG痕が残るように打つことが推奨されていたため医師は「ハンコ注射」を強く押し付けるように接種していました。しかし近年は軽く押すだけで十分に効果があることが証明されたため、「軽く」打つことが主流となってきています。従ってお子さんの注射痕が目立たなくても心配する必要はありません。

⑥ MR ワクチン

麻疹と風疹の混合ワクチンです。

- 麻疹：非常に感染力が強く、高熱と風邪症状から始まり発熱がおさまりにかけたところで再び高熱となり全身に発疹を認めるのが特徴です。肺炎、中耳炎や脳炎を合併し、時に死に至ることもあります。まれに慢性に経過する脳炎（亜急性硬化性全脳炎）となり後遺症を残す方もいます。
- 風疹：発熱や発疹を呈する病気です。一般に良好な経過をとりますが、まれに血小板減少性紫斑病（止血の役割を持つ血小板が減少して出血しやすくなる病気）や脳症を合併することがあります。風疹で問題になるのは、先天性風疹症候群と言って、妊娠初期に感染した母体から胎児にも感染して白内障、

難聴や心疾患などの重い後遺症を残すことがあることです。これを防ぐためには社会全体でワクチン接種を徹底して流行を抑える必要があります。ワクチンは1歳から開始となります。

⑦水痘ワクチン

水痘は水疱を伴う発疹が全身に現れる病気で、今も度々流行が見られます。肺炎や、皮膚が腫れ上がる蜂窩織炎^{ほうかしきえん}などの細菌感染症を合併することもあり、まれに神経系の合併症も報告されています。水痘の発疹は意外と深い傷となって皮膚に沢山の痕が残ってしまうことがあります。ワクチンを打つことで発症してもこういった症状が明らかに軽くなることが知られています。ワクチンは1歳からの開始となります。

⑧日本脳炎ワクチン

日本脳炎はブタから蚊を介してヒトに感染し、高熱、頭痛、意識障害、けいれんなどの症状を呈します。脳炎を発症した際は重い後遺症を残したり、死に至ったりすることもあります。日本ではワクチンの普及で患者数は減少しそのほとんどが高齢者ですが、まれに小児の報告があります。標準的な接種開始時期は3歳とされていますが、実はこのワクチンは6か月から接種可能です。とくに西日本では日本脳炎ウイルスに感染しているブタが多いため、早期から接種開始を推奨している地域もあります。開始時期については、かかりつけの先生とご相談ください。

⑨2種混合ワクチン (DT ワクチン)

小学6年生から接種します。2種とはジフテリアと破傷風で、乳幼児期の5種混合ワクチンによる免疫を強化するために行います。

⑩ヒトパピローマウイルスワクチン (HPV ワクチン)

ヒトパピローマウイルス (HPV) は子

宮頸がん、外陰がん、肛門がん、中咽頭がん等の原因ウイルスです。我が国では子宮頸がん予防のワクチンとして、女子に小学校6年生から接種します。かつて副反応が問題となり中止となった時期もありましたが、2022年から再開となりました。2023年から9種の型のウイルスをカバーした製剤の公費負担が認められ現在メインで使用されています。ワクチンを小学校6年生～高校1年生の間に接種することで子宮頸がんの原因の80～90%となるウイルスの感染を予防できることが知られています。このワクチンは15歳以下で開始された場合は2回の接種で良いですが、16歳以上で始めた場合は3回の接種が必要となるためご注意ください。副反応などについて不安や懸念がある場合はかかりつけ医に相談してから接種するかどうかが決めましょう。

なお、2025年秋より小学6年生以上の男子も任意(自費)接種が可能となりました。自身のがんの予防はもちろん、将来女性へウイルスを感染させることを防ぐ目的もあります。詳細はかかりつけ医にご確認ください。

任意接種 (自費) のワクチン

任意接種のワクチンは費用が自己負担になります。主なワクチンを以下に挙げます。

①おたふくかぜワクチン

おたふくかぜは片側または両側の耳の下からあごにかけて腫れて痛みを伴う病気で、発熱することもあります。時に髄膜炎や膵炎、思春期以降では男性不妊の原因となりうる精巣炎、女性の場合は卵巣炎を合併することもあります。難聴が合併した際は後遺症として残ることがあります。ここ数年おたふくかぜは流行していませんが、いつ流行がおこるか分か

らないため注意が必要です。ワクチンは1歳から接種可能です。

②インフルエンザワクチン

季節性インフルエンザのワクチンは注射薬に加え、2024年から2歳以上の方は点鼻薬が選べるようになりました。日本では注射薬は13歳未満までは2～4週の間隔で2回接種することが推奨されています。一方、点鼻薬は1回の投与（左右の鼻に噴霧）で良く、投与後1年近く効果が持続すると言われています。ただし点鼻薬は生ワクチンのためインフルエンザにかかったような症状をおこすことがあります。また価格は現時点では注射1回分の倍以上で、19歳以上の成人への投与はまだ認められていません。

③3種混合ワクチン（DPT ワクチン）

百日咳ワクチンはかつての3種、4種混合、今の5種混合ワクチンに含まれていますが、小学校に入る頃には効果が切れてしまうため、小中学生以上で流行が

おこります。さらに問題なのは家族を介して乳幼児が感染し重症化することです。こういったケースを防ぐために、日本小児科学会では2018年より5～7歳での3種混合ワクチンの追加接種を推奨しています。自費負担となりますが、とくに乳幼児がいるご家庭のごきょうだいには検討されることをお勧めします。

まとめ

小児期に接種するワクチンは上に述べてきたように非常に数が増え、何をいつ打つべきかを計画するのは簡単な作業ではなくなっています。今はスマホでワクチンのスケジュールを管理するアプリもありますのでこういったツールを活用するのも良いでしょう。また、かかりつけ医にお願いすれば無理のないスケジュールを計画してもらえます。副反応などの不安点についても遠慮せず医師に相談しましょう。

表 小児期の予防接種の開始時期

定期接種

- ◎ 0歳から始まる定期接種
 - ・ 5種混合ワクチン（DPT-IPV-Hib）
 - ・ ロタウィルスワクチン
 - ・ BCG（結核のワクチン）
 - ・ 肺炎球菌ワクチン
 - ・ B型肝炎ワクチン
- ◎ 1歳から始まる定期接種
 - ・ MRワクチン
 - ・ 水痘ワクチン
- ◎ 3歳から始まるワクチン
 - ・ 日本脳炎ワクチン（※生後6ヵ月から可能）
- ◎ 小学6年生から始まる定期接種
 - ・ 2種混合ワクチン（DTワクチン）
 - ・ ヒトパピローマウイルスワクチン（HPVワクチン）（女子）

任意接種

- ・ おたふくかぜワクチン（1歳～）
- ・ インフルエンザワクチン（注射6ヵ月～、点鼻2歳～18歳）
- ・ 3種混合ワクチン（DPT）（5～7歳）
- ・ ヒトパピローマウイルスワクチン（HPV）（男子）（小学6年生～高校1年生）